

## 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

### Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ  
『ふるさと意識なくして地域の創生なし』

## 会報

NO. 38

2016. 3. 25 発行

編集責任：河地 清

[Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp](mailto:Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp)

## 第38回「ふるさと春日井学」研究フォーラム』

テーマ『地域活性化の本質的課題—「ふるさと春日井学」の実践を中心に—』

平成28年3月6日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『地域活性化の本質的課題—「ふるさと春日井学」の実践を中心に—』で開催しました。講師は本会会長河地 清氏でした。

市民26名の参加がありました。



河地 清 氏

『地域活性化の本質的課題—「ふるさと春日井学」の実践を中心に—』

### 講演風景

#### —発表要旨—

本研究フォーラム会長河地清がこの3年間の「ふるさと春日井学」の活動を振り返って、「まちづくり」とは何か、「ふるさと学」とは何なのか、その基本をあらためて押さえ、「その本質とは何なのか」に迫ろうとする講演となった。特に昨年来、地域振興と地域の活性化とは何か、地方創生とふるさと創生との違いについて考えてきた。「まちづくり」については今日的な新しい発想に基いた概念が必要だと考えてきた。本研究フォーラム立ち上げから3年間言い続けてきた「ふるさと意識なくして地域活性化なし」のフレーズの中に地域活性化の「本質」があると確信できるようになったと語る。

#### I. 「本質」に迫る問題意識のきっかけ

なぜ本質論が必要か。そのきっかけは春日井市の「第五次総合計画」（2008-2017年

度の10年間)の見直し案だ。総合計画は①基本構想(10年間の構想で、都市の将来像「人と地域が輝き、安全安心で躍動する都市」を実現するため、まちづくりの理念とその目標(6つ)、基本的な方向性を明らかにする)②基本計画(基本計画で定める目標ごとに、基本施策を設定(48の施策)し、その施策ごとに個別の施策の体系とその方向性を定める)2008-2012年度と2013-2017年度に分ける③実施計画(基本計画で定められた施策の方向性をもとに、財政状況や社会ニーズを考慮して、具体的に実施する事業を決定する短期計画で、3年間ごとに立てられる。)第37次(2008-2010年度)から始まったが、実際には毎年の変更作業が行われる。最後の第45次実施計画は2015-2018年度のもの。10年計画の最後の2年間を事実上1年間延ばしている。継続事業のほかに、新規に実施する事業や事業内容を拡大・充実する事業も含まれる。また、国の地方創生関連交付金の見直しがあればこの45次実施計画は見直されるとしている。この最後の計画は本来、行政事情だけでなく、市民の意見を取り入れべきであるという主張である。「まちづくりの理念」との整合性の再点検が必要である。

## II. 春日井市の第五次総合計画の「実施計画」で注目する3つの項目

施策で意識の変化が見られるとする。①観光について、書道・サボテン・剣道の他市にない個性的な地域ブランドの観光情報発信。(注、今回春日井駅の観光案内所の運営支援も加え拡充、予算は750万円)②商店街活性化として、「まちの担い手養成塾」(注、予算100万円)「商店街空き店舗活用助成」(注、予算636万円)「コミュニティビジネス支援」が継続事業となる。商店街活性化のための施策では、商業者の取組みだけでなく、区や町内会、まちづくり団体やボランティア組織等の幅広い団体の協力が不可欠とする。③地域活性化について、従前の計画では、市民や市外の人に「誇れる歴史と文化」はないとし、観光活用による賑わいづくりは諦めたと明言していたが、「民間の発想による観光の産業化を支援する」と転換している。商店街の活性化についても、地域資源活用をコンセプトとした「エリアマネジメント」の発想が示されている。(注、今回「計画的にまちづくりを進める」として、立地適正化計画策定を新規に加えている。予算は823万円。市施行の松河戸の土地区画整理事業に2億1,384万円、組合施行の熊野桜佐と庄名土地区画整理事業、西部土地区画整理事業の指導に8億1,146万円の予算。高蔵寺ニュータウンまちづくり推進を3か所で新規に追加。6,736億円の予算。その特徴は、地域住民や事業者等が創設するまちづくり会社、地域住民、市民団体等と連携し、新たな魅力を創出するとしているところ。駅周辺の拠点性を高める整備事業は継続し、春日井駅周辺整備に25億5,625万円、味美駅周辺整備は「協議を進める」ための費用7万円を計上。)

「地域活性化」の取組みは今日的な重要課題であり、その取組みが真に実を結ぶためには、今一度この問題を内発的、本質的な原点に立ち返って考える必要がある。「地域活性化」成功の鍵は住民の意識の中に、どれほど「ふるさと意識」や「わがまち意識」が

芽生え定着しているか否かだ。「ふるさと意識なくして地域活性化なし」というコンセプトが大前提だ。

「ふるさととは何か」「ふるさと意識とは何か」を考察することは、この問題の本質を考察することになる。とその本質を探ることに挑戦する。

### Ⅲ. 「ふるさと学」の定義、「ふるさと学」と「まちづくり」の思想、「ふるさと意識」

1) **ふるさと学の定義** … ふるさとの再生、ふるさとの活性化が叫ばれ「地方の時代」といわれて久しい。「ふるさと創生事業」（1988-89年）「まちの活性化事業」という言葉が始まりで、地域の事は地域でという「地方分権の価値観」と従来の「中央集権的地域づくり」の発想への反省が、真の意味での「ふるさとの再生」と「ふるさとの活性化」とは何んなのかを考える契機となったとする。「住民の意識の中に、どれほど「ふるさと意識」や「わがまち意識」が芽生え定着しているか否か」を考えても、また新たな課題や問題点が現れてくる。むしろ、『ふるさと意識』の希薄化と文化、歴史遺産の劣化と破壊は以前にも増して進行している、という現状にぶつかる。「ふるさと学」定義は、「豊かで安心・安全な生活空間を創ること」の方法と理論を研究する総合領域を含む学である。と概念定義する。

#### 2) 「まちづくり」の本質的論点 …

「まちづくり」とは、地域の資源を磨き、価値を創造すること。（田村明『まちづくりの実践』より）\*「ふるさと意識の変遷」年譜表に記述されているサブカルチャーとしての歌唱、歌謡曲の歌詞の変遷の中に「ふるさと意識」を読み取ることが出来るとして、「故郷の空」「故郷の廃屋」「故郷を離るる歌」のメロディーを流された。明治維新から高度経済成長までの歴史スパンで見た時に「ふるさと意識」が破壊され崩壊して行く流れが社会経済史的に解るとされる。そして現代は、ほんとうの意味での「ふるさと」を見直し、再生しようとする社会へ価値観が転換しつつある時代であるとする。

#### 3) 「ふるさと意識の形成と醸成」の重要性 …

「地域の魅力・歴史、自然文化の保存」に関わる学習・教育、行政、地域(商店街)・生活者、市民団体、商工会議所、観光協会などの力をどう結集するか。そのリードで市民の意識が変わる。とする。6項目中3項目は省略する。

### Ⅳ. 今後の課題～まちづくりの方向性

成功事例とされる勝川商店街の活性化は「本当の意味でのまちづくりであったのか」も検証する必要がある。市内高校生（県立春日井商業）が1990年に調査した報告書に①地域コミュニティの崩壊と形成の課題②昔ながらの空間の喪失が意味することを問う③従来の街並みとの整合性を量る④街を維持するコスト・環境負荷の増大問題を指摘していた。今日に活かせる先を見通した調査であった。「ふるさと意識」に支えられた「まちづくり」こそ「本当の意味でのまちづくり」であり、その検証が重要である。長期的

視点の中で地道な情報発信と直近の課題・問題点に対処し、実践活動が求められる。と講演を結ばれた。注)内容が学会発表用であるのでかなり割愛させていただいた。(記録：塚田忠雄)

## OPINION

### 『ふるさと春日井「まちづくり」の風景』

#### — 「なんとかしなければ」は共通の思い —

去る3月11日(金)午後2時46分、5年目の東北大震災被災の日が巡ってきました。

今、本当の意味で「ふるさと」を意識し、この現状を「なんとかしなければ」と一番考えている人達は、東北地域で被災した人達だと思います。それも二重の意味で被災に遭遇してしまった人達です。津波、地震といった自然災害は人間の叡智と故きに学びながら次の生き方に活かしてゆくことが出来ていきますが、人間の叡智によって享受してきた「ふるさと」の自然と人々の幸せを破壊、崩壊させてしまった「原発事故」というリアルな現実、人間の叡智と歴史に学びながら元の「幸せ」に回復することができるのか否かということです。「運命」とあきらめなければならぬのでしょうか。「科学の進歩は人間を幸せにしたのか」という問いかけに繋がる問題です。「ふるさと」は、人々を育み、癒し、成長させてくれる愛着と誇りに満ちたスペースであり、個々の人間の生きる原点でもあるはずですが、しかし、人間の叡智が生み出した「原子力」というエネルギーは、人々に大きな恵も与えましたが、それ以上に人間の生きる原点を根こそぎダメにもしてしまった現実があります。人間がその現実を造りだしたのですから自然のせいにするのではなく、人間の叡智で解決しなければなりません。五木ひろしの大ヒット曲「ふるさと」は、「あゝ 誰にもふるさとがある ふるさとがある♪」と唄って人々の共感を得ています。しかし、「原発事故」被災者にはもう、帰る「ふるさと」はありません。これ程残酷な話はありません。明治20年代から今日まで続いている「足尾鉍毒」問題に我々は何を学んできたのかが問われます。この問題解決に生涯を賭した、田中正造は、破壊されて行く「ふるさと」の情景を見て「真の文明とは山を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし」と日記に認めました。数々の「公害」問題に何を学んだのかと、未来を生きる若者達に問われた時、答え方によっては、その「見識」を問われることにもなってしまいます。

「地方創生」とか「地域活性化」が国を挙げて声高に叫ばれている今日、「ふるさと」を奪われてしまった人々には、どれだけ愛着を持ち誇りに想い地域を愛する「ふるさと意識」があっても、どうすることも叶わない、為す術がないのです。「どうしてこんなことになってしまったのか」を真剣に考えてゆくことが未来に繋がる唯一の方法であると思っています。今日、一番「ふるさと意識」を強く意識している人達は、このような人達だと思っています。そして、ふるさとを再生するために「なんとかしなければ」強く願っている人達だと思っています。

翻って、我々はどうか、と考えたとき、大きな災害もなく、毎日が平穏無事に過ぎ、日常に不

便を感じずとも指してなく、どっぷりとぬるま湯に浸かったように、東北の人達のような切羽詰まった危機感もなく、むしろまだ夢よもう一度と過去の成功体験を夢に見て、何時かきっと良い日が来ることを信じながら、過ごしてはいないだろうかと思われさせられます。一方では、現状ではダメだと閉塞感、危機感を感じ、今「なんとかしなければ」という意識の人々も存在することも事実です。しかし、現代社会は着実に「個から集団へそして個へ」「一人はみんなの為に みんなは一人のために」という価値観が醸成されてきていることも見逃せません。地域分権意識、ボランティア意識、地域協働意識、そして「ふるさと意識」の醸成こそがこれからの地域活性化への本質ではないかと思っています。「**adapt program**」(地域のことは地域でという意識)の時代だともいえます。私の尊敬する友人で文明学者、都市工学者の月尾嘉男氏(東京大学名誉教授)は、『**情報時代とまちづくりー100年単位の目標転換ー**』(平成26年4月5日「ふるさと春日井学」研究フォーラム講演)の中で、今こそ従来の価値観を含め発想(視点)の転換を図るときであると主張されます。そうはいっても、発想、や思考はおいそれとは変えられるものではありません。意識が変われば行動も変わるという哲学的命題もありますが、やはり物事が変わるという現象は、行動する人間の意識が変わらなければ、状況は変わってゆきません。

民衆の意識変化を流行歌の変遷から分析された、高橋真碩氏は『流行歌でつづる日本現代史』(1985年あゆみ出版)の中で「流行歌はただのはやりうたではなくて、あきらかに意図的に流行らせる歌ですけれど、しかし、そのどこかの片すみには民衆の声がこめられていないでしょうか。そこには声なき民衆の心の歴史がきざまれていないでしょうか。」と述べ、その時代の民衆意識を分析しています。大正の初期「故郷を離るゝうた」(ドイツ民謡)が流行ります。「さらばふるさと さらばふるさと ふるさとさらば♪」、大正5年室生犀星が詩集叙情小曲集「小景異情」の中で「故郷は遠きにありて想うものそして悲しくうたうもの」と謳って、民衆の共感を得ます。この時代の民衆の「ふるさと意識」を端的に表現しています。昭和の初期に入ると柳田国男の『郷土生活の研究法』が発表されます。そして郷土教育が盛んに行われました。ふるさと意識の醸成運動です。しかし、昭和6年9月18日満州事変の勃発により民衆の「ふるさと意識」は、国家統制されて行きます。戦後復興経済を経て高度経済成長の時代を迎えます。昭和52年遠藤実作詞・作曲「北国の春」が大流行します。発展途上であった中国でも大変流行し共感を得ました。「あの故郷へ帰ろうかな 帰ろうかな♪」と「ふるさと意識」が時代とともに変化してきていることを感じ取ることができます。「ふるさと」をテーマとした歌は夥しくあります。分析すれば興味深い結果が出ると思います。新沼謙治作詞・作曲「故郷は今も変わらず」は、「ふるさと未来へ続け♪」と謳う。今日の、原点回帰と地域再生を願うかのように、今日の民衆の心を反映しています。正に「歌は世につれ世は歌につれ」の言葉どおり、歌の中に見る「ふるさと意識」の変遷も遠くから望む「ふるさと」から、帰りたい「ふるさと」へ、そして未来を切り開く「ふるさと」へと民衆の意識は変化してきていることが垣間見られます。活性化する「ふるさと」へ「なんとかしなければ」ならない使命が現代の私たちに課せられているように思います。

(文責：河地清)

次回

「ふるさと春日井学」  
研究フォーラム (案内)

「ふるさと意識なくして地域活性化なし」

第 40 回

日 時：平成 28 年 5 月 1 日 (日) 13:30~15:30

テーマ：『地域活性化と「町内会」の役割』

講師：中田 實 氏 (東海自治体問題研究所副理事長)

場所：市民活動支援センター・ささえ愛センター 2 階第 1 集会室

フォーラム内容： 地域活性化の問題と「町内会」(自治会)は密接な関係にあります。地域の生活者で組織される「町内会」の意識がそのまま「まちづくり」に反映されて行くからです。今日「町内会」の抱える問題は深刻です。会長、区長、役員、のなり手がいない、会員脱会現象、コミュニティの希薄化等々、地域コミュニティの現状、在り方、問題点を解説してもらいます。・・・続きは FORUM で

(各回非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。)

事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索